

世界の情報の交差点で

——大好きな私になっていく

横田啓子カーター

Keiko Yokota Carter

1956年 大阪市生まれ
1980年 津田塾大学国際関係学科卒業
1982年 ウェスタン・ワシントン大学
留学 (82年卒業)
1983年 大阪府立高校教員 (-86)
1986年 再渡米
1987年 コーネル大学講師 (-89)
1990年 スタンフォード大学大学院国
際教育学修士
アマースト大学講師 (-95)
1997年 ミシガン大学大学院図書館情
報学修士
1999年 ワシントン大学東アジア図書
館日本学研究所司書 (-現在)
シアトル在住

私がアメリカに来たのは一九八〇年七月四日であった。なんてカラフル！初めて日本の外に出てサンフランシスコ空港に到着したとき、人々の感じも装いも日本と違うことがとても印象的であった。その夜、独立記念日のお祭りにわくワシントン州ペリントンハムにあるウェスタン・ワシントン州立大学で希望に満ちて留学生活を始める。私は幼い頃から広い世界への興味があり、いつか男尊女卑の日本とは違う、男女がパートナー同士である社会で生きたいと思っていた。津田塾在学時には女性問題研究会「胡蝶」を作り、米国の若者文化や女性運動など新しい考え方に心を奪われた。米国ではフェミニズムは女性の労働条件の改善だけではなく、人間存在のすべての面における変革を迫り、知の領域では根本的な世界観と発想法そのものの転換を要求し、新しい学問として女性学が生まれていた。このような女性たちの創造的な活動に触れ、女性学を学びたいと思い、また民主的といわれる社会で実際に暮らしてみたくてウェスタン・ワシントン大学の留学生となったのである。

一人でアメリカに行くのは怖くなかった。海に向こうには女性として同じような経験をし思いを抱き夢を持つている「友達」がいると確信していた。そしてそれは事実であった。今では、世界中性別を超えて友人がでさる。私たちが話す「共通言語」は、相手に対する繊細な配慮と思いやりであり、その人から発せられる言語以上の人間性の輝きであると思うようになった。

米国女性は想像していた以上に活発であった。自分の意見は明確に主張するが話し方は穏やかで、日本とはまた違った意味での「心遣い」があった。お作法に準拠する気遣いはないが、個人の権利や嗜好に対して細かに配慮し尊重するのを感じた。そして、自分や地域の状況に不満があれば、いつまでも文句を言わず、人のせいにせず、個人で、あるいはグループを作って解決法を考え、自ら行動を起こす。強姦危機救済センターも女性を中心となって資金集めして作り、英語のあまりできない私にも人種や国籍にこだわらず無料で研修を受けてくれた。イラク戦争で世界中の人が国際協調を無視する米国の国益中心の単独行動主義に幻滅を感じているが、米国建国という歴史体験が人類に夢を与え、この国が自由と平等の国であろうとしたことは歴史的事実である。平等を自明の真理とし、助けのいる人には手を差し伸べ、分かち合い助け合い、自分たちの自由と権利を守ることは自分の責任とする。普通の女性たちにもこの民主主義の思考と行動様式が浸透していた。

八〇年代の米国は、レーガン政権の公的事業の民営化を進める新自由主義経済政策により大きく変化していた。多くの学生が大学を去り、大学だけが産業である小さな町では急にアパートに空室が目立ち始めるなど、政府の経済政策の変化が小さな町にまで現れる速さに、米国と日本の社会構造の違いを強く感じた。

八二年に大自然に恵まれたワシントン州を去り、ニューヨーク市で大学院生活を始める。路上のホームレスと最高級マンションの住人、貧富の差が激しい大都会での学生生活はつらかった。でも、困難でも自由を求めて活路を開こうとしている日本女性も多くいた。そのほとんどは、一度日本の企業に勤め、女性差別の壁の前で将来性を見出せず、「自由の地」で夢を追いかけようとしていた。私自身も日本では自分の人生が切り開か

れていくような期待が抱けずなんとか米国に残ろうとしたが、ニューヨークでの生活はその頃の私には厳しすぎた。

私は二五歳で人生を分かちあえる伴侶を求め家族をもちたいと思い始めていた。その恋はすぐに適わず、また、米国は創造的な個人には活動の場が自由にあるものの、目標が明確でなく、情報収集力、自己表現能力や社交力、生活力に乏しい者が一人で人生を切り開いていくのはとても厳しいところだということを感じた。

米国のもう一つの難しさは、多様な文化がせめぎあう圧力の中で、自己の文化と権利を守りながら共生できる均衡点を常に探らなければならないところにある。私も白人文化に同化するのではなく、日本の伝統に育まれた自分に誇りを持ち個性を失わず、しかも白人中心の競争社会で差別や偏見に負けず中流以上の生活を築くために、どのように周囲と自分との折り合いをつけなければならないのか常に悩む。ニューヨーク在住時に知った津田塾の先輩の一人である志村学長は、当時、国連政治部長であったが、そのたおやかで謙虚な姿は、時に攻撃的に感じられる欧米女性とは違い、厳しい国際社会に生きる日本人女性像の一つとして心の支えになっていた。

八三年に日本に帰国し公立高校で英語を教える。留学時代に知り合ったクリスチャンの米国男性との太平洋を越えた恋が実り結婚、八六年に再渡米する。カリフォルニア在住中に日系人教会に通いキリスト教に導かれる。八〇年代、日本企業の米国進出が進む一方で、米国は国際経済力を失い「危機にある国家」と自ら認め、その原因の一つは教育にあるとした。私はスタンフォード大学大学院で国際開発教育学を学んでいたが、当時は日本の教育制度や企業の研究開発部門の研究の最盛期であり、質の良い労働者と消費者を作り上げた日本の学校教育と社員教育、徹底した品質管理が日本の発展要因として議論されていた。

八九年にマサチューセッツ州に移り住む。日本経済は世界第二となり、大学では日本研究や日本語を学ぶ学生が急増。私はアマースト大学で日本語講師の職を得た。同大学はキリスト教精神に基づく私立大学で、新島

襄や内村鑑三をはじめ日本の近代化を担った多くの人々や、歴代の駐米大使の数人が留学している。アマーストは人口わずか四万人の小さな大学町であるが日本とは歴史的なゆかりが深い。東部のプロテスタントの精神と文化が明治期以降の日本の知識人の思想形成や文化に深い影響を与え、今もなお日本社会に脈々と地下水のように流れているのを私はこの地で知った。一方では日本たたきが始まり、私は民間レベルの日本理解と草の



国際研究者との会で（筆者右端） 2003年

根交流が必要だと朝日新聞論壇へ投稿したことからさまざまな形で民間交流のボランティアをすることになる。論壇への寄稿がきっかけで知己を得たある日本の団体からアマースト大学に寄付を受け、日本語学科に専任講師職が新設された。白人文化中心の米国の大学で日本学の地位を高めるのに貢献できたと思う。また、ふるさと創生基金を用いて姉妹都市の締結を希望する日本の小さな町の方たちに協力したり、日米両国の小中高校の教諭の研修や交流の企画運営に協力した。自然が豊かで草の根民主主義が息づいている地域で暮らし、日米交流にも携わるなかで、私は日米両国の歴史と自分の人生が深く繋がっているのを感じた。

米国ではその頃社会の変化に対応して新しい動きが始まっていた。多文化教育と情報工学の発展である。米国の労働人口構成の八三%が女性、非白人、移民になりつつあるときに教育内容は依然として白人男性文化中心で、それ以外の文化や歴史は

きちんと教えられてこなかった。アマーストの学校では多文化教育に早くから取り組んでいた。それは公民権運動、女性運動という歴史の延長上にあり、その教育改革も草の根民主主義に支えられている。私は非白人にして女性。国際結婚ではエスニシティとジェンダーの緊張や葛藤が常にあった。日本にはもう属さないが、米国民でもなく、しかし異文化的存在である私のアイデンティティは不安定であった。さらに、外から見て、日本もまた多文化が進む世界史的潮流の中で国のアイデンティティが揺らぎ始め、構造的な変化が求められているように思えた。そこで、米国の多文化教育の歴史と内容について調べることによって自分の居場所を見つけ、日本の歴史と社会文化を考え直したいと思い、九六年に『アメリカの多文化教育』を日本で出版した。

日本がバブル経済で浮かれている間、米国では静かに産業革命に匹敵する革命が進行しつつあった。情報技術革命である。情報技術を持つか持たないか、再教育が可能な人間かどうか、まさに高度知的社会化が進行し二極化が進みつつあった。自立でき満足できる仕事を模索していた私は啓示を得た思いで図書館から情報学へと変身をとげたミシガン情報学大学院に戻り、図書館情報学の修士号を取得した。その後、留学時代より太平洋岸から、東部、南部、中西部にも住み、米国各地の多様な文化と暮らしを経験し、離婚した後、まるで人生すごろくの振り出しに戻るように最初に住んだワシントン州で日本学研究所の職を得た。そして二〇〇〇年に米国民権を取得する。

現在は、仕事、国際交流ボランティア、運動にテートにと恵まれて暮らしている。だんだん、自分が大好きな私になっていくようで嬉しい。世界中の歴史と多様な文化は人類の宝であり私の一部でもある。米国の政治が世界の平和に多大な影響を与えることを考えると、米国民として選挙権を持つことは「世界市民」として人類の宝を守り継承するために重大な責任があると思っている。また、情報を媒介として人々を文化と歴史を超えて結びつけることにより平和な世界を創ることに貢献したいと願っている。

アメリカに生きる 日本女性たち

在米津田塾同窓生の軌跡

藤田文子・草間照子 編



ドメス出版



ISBN4-8107-0636-2

C0036 ¥1800E



定価：本体1800円+税

アメリカに生きる
日本女性たち
在米津田塾同窓生の軌跡

藤田文子・草間照子 編



ドメス出版